日本財団 THE NIPPON FOUNDATION 海と日本 PROJECT

栃木発！未来の海をまもり隊

日本財団が推進する海と日本プロジェクトの一環として「栃木発！　森と海の秘密探検ツアー　未来の海をまもり隊」（海と日本プロジェクト in 栃木県主催）が８月 22 ～ 24 日の３日間、県内と茨城県で実施されました。たくさんの応募の中から選ばれた県内の小学５、６年生 20 人が、体験学習などを通して栃木と海のつながりを考えました。

県内小学生 20 人が体験

海の未来思い、源流の森に学ぶ

1日目

栃木県は海なし県ですが、新鮮な魚が味わえる寿司やサケを使った郷土料理の「しもつかれ」など、海からの恩恵を受けています。ところが、海の環境がこのまま変化してしまうと、30年後には食べられなくなる魚が出てくるかもしれません。

元気な海を未来に残すため、1日目は「栃木の森と海のつながり」「森が果たす役割」について考えました。

宇都宮市内のとちぎテレビに集合した子どもたちは、林野庁関東森林管理局日光森林管理署の櫻井崇裕さんの講義に耳を傾け、森の環境を守ることが豊かな海を守ることにつながることを学びました。

次は、那須烏山市内を流れる清流那珂川へ。検査キットを使用して上流部、下流部での水質調査と生物調査を行いました。その結果、きれいな水の上流部と生活排水が混ざった下流部では生物にも違いがあることが分かりました。森から続く生態系の大切さを思いながら、那珂川名物アユの塩焼きを味わいました。

いよいよ茨城の海へ移動。鉾田市の海岸を散策して海の現状を目にし、自分たちと海とのつながりを実感していました。夕食時は、ホタテなど海の幸のバーベキューを囲み、楽しいひとときを過ごしました。

2日目

2日目は、茨城県栽培漁業センターで体験学習。同県栽培漁業協会の中村丈夫さんと鶴見祐輔さんから、茨城県の漁業をテーマに同県の魚「ヒラメ」の生態や漁獲高の変化、「栽培漁業」について学びました。栽培漁業は、魚や貝が小さいうちに海へ放流し、大きくなったら漁師や釣り人が取る漁業。施設見学やヒラメのえさやり体験を通し、子どもたちは栽培漁業への知識や興味を深めていました。

次に訪れたのは、大洗町漁業協同組合。同組合参事の臼庭昭伸さんから「茨城県の海の現状、変化と栃木県のつながり」について話を聞きました。「海水温が年間を通して高くなっている。取れなくなった魚もあるし、逆にタイは年中取れる」という現状などを学びました。

さらに、親潮と黒潮がぶつかり多様な生物が生息する「潮目の海」が地球温暖化の影響で北上し、取れる魚の種類や漁獲高が変化していること、茨城の海と栃木の森、那珂川との関係についても理解を深めました。

午後は、海を体感するサーフィンに挑戦。波に乗る楽しさを満喫しました。そして子どもたちは「ごみがあったら拾う」など、好きな海の環境を守るために自分たちができることを声にしていました。

3日目

最終日は、2日間を振り返り、「学び考えたこと」「私たちにできること」を絵とメッセージで表現＝**写真下**。「海のきれいはみんなの責任」など、班ごとに伝えたいことを発表しました。

プロジェクトを通して海への思いを新たにした子どもたち。絵に込めたその願いは、お弁当のパッケージとなって多くの人に発信される予定です。

1班

2班

3班

4班